

3. 乳牛の若令肥育

1 調査農家

青梅市内にある農業法人M牧場で、現在の飼養規模は、搾乳牛52頭、育成牛38頭、乾乳牛5頭で、作業従事者は、男8人、耕地面積は1.6haで、全部飼料作物の栽培にあてている。

年間約40頭の子牛が生まれ、その約半分は、雄子牛であるが、雄子牛は、今までは全部スモールとして出荷していた。しかし牛肉資源の不足している時でもあり、自家産の雄子牛を濃厚飼料の不断給餌により省力的に管理して肉牛として出荷することとした。

2. 肥育の実態

(1)肥育牛の動態

この経営は酪農関係が酪農部と育成部に分れており、生まれたばかりの子牛を肥育に導入する場合に付、酪農部から1頭4,500円で繰り入れ、ある程度大きくなったものを導入するときには、その時価で肥育部門が育成部門から購入したという形をとっている。42年度中は20頭繰り入れ4頭を購入した。4頭購入のうち4月購入の3頭は41年11月生まれで@35,000円、8月購入の1頭は41年4月生まれで@50,000円であった。

(2)畜舎

肥育豚舎を改造した2~3頭の追込み式である。牛房の広さは3.6m×2.3mである。

(3)飼料の給与方法

生後1ヶ月間は、初乳を水でうすめて飲ませる。生後10日~40日は人工乳Aを、40~90日は人工乳B、90~180日は肥育用前期、180日以降出荷までは肥育用後期を不断給餌している。粗飼料は、稲、わら、牧草、エンシレージ等である。

(4)飼育労働時間

給餌は不断給餌であるが、午前6時30分から6時50分までと、午後7時30分から8時までの2回わらや乾草を給与し、濃厚飼料を補給する。

3. 出荷牛の収支計算 11月に2頭 12月に1頭計3頭出荷した。11月に販売した2頭について、収入支出を示すと第1表のとおりであった。

屠肉歩留は約55%でやや小さかった。枝肉の単価は672円と660円であったが、同月の中央卸売市場の乳牛(めす)の卸売価格に比較すると、上696円、中648円の中間の値となっている。1頭当りの差益は、32,720円と24,152円であった。1日1頭当りの差益は100円

出荷牛の収支計算

	No. 1	No. 2
生 体 量	440Kg	435Kg
枝 肉 重 量	244Kg	241 "
屠 肉 歩 溜	55.3%	55.4%
枝 肉 単 価	67.2円	660円
ご み 皮	4,000 "	4,000 "
収 入 合 計	167,568円	159,000円
素 牛 代	35,000 "	35,000
飼 料 費 そ の 他	92,998	92,998
屠 場 手 数 料	1,700	1,700
運 賃 そ の 他	5,150	5,150
経 費 合 計	134,848円	134,848
差 引	32,720	24,152

~130円であった。

4. まとめ

自家産の子牛を濃厚飼料の不断給餌により1年間肥育して、450Kg~500Kgにして出荷する、いわゆる乳牛の若令肥育について、その実例を調査したが、まだ開始したばかりで出荷頭数も少なく、細部にわたって調査することはできなかったが、気づいた点を記すと次のとおりである。

(1)事故の起き易いのは哺乳中である。特に、冬期間は冷えによる下痢のため死亡することが多い。床の清掃や防寒につとめ、事故を防止することが重要である。

(2)省力的な飼養管理という点からいうと、不断給餌は有効であるが、制限給餌に比較して飼料のロスが多くなる。飼槽の構造を工夫して飼料のロスを少なくするようにしなければならない。

(3)肥育の最終段階である枝肉単価の違いによる収入の差は大きい。

飼料その他同一の管理方法によっても、最終的に肉質が異なってくるというのは、乳牛の系統によることも大きいと思われるが、なお乳牛の肥育技術についても検討する必要があると思われる。

(4)経営の形態については、子牛から出荷までを同一の経営内で行なうのは資本の回転も悪く、子牛育成中の事故も多いので、育成技術のすぐれている農家が200~300Kgになるまでの育成の段階を分担して、それを素牛として肥育農家に供給し、肥育農家が500Kg前後にして出荷するとい

